

冒頭部分

東京国立博物館蔵

草書千字文

嘉靖十四年（1535年）紙本 縦約27cm 53歳

師の文徵明や祝允明より筆力が強く霸氣がある。楷書は文徵明の影響が大きいと言われているが、行草書では自由奔放で、米芾や楊凝式の影響を受けたなどと言われている。

玉字文



天地玄黃宇宙萬物
蒼鶻日月星辰此皆
列物之數惟此生物
以自然之理無非主宰
名謂之陰陽水火土
五行者皆爲而爲之
號爲霜金生器水玉

（前略）

沈周、文徵明の水墨写生を基礎に、元の四大家などの様ざまな技法を取り入れ個性的な写意水墨画を生み出した。はじめ文徵明、米芾の影響を受け、晩年は楊凝式を好んだといわれる。草隸、行書、草書が巧みであった。草書は穏やかな書風のものから激しく力強い狂草作品まである。



梅図扇面・冊

台北故宮博物館蔵

気品のある、清々しい着色された紅梅図。

(自題) 玉蕊衝寒故意開、天葩更解入林来。幽人自得清冷趣、手捲疎簾覆一杯。道復



写生卷 牡丹図の部分

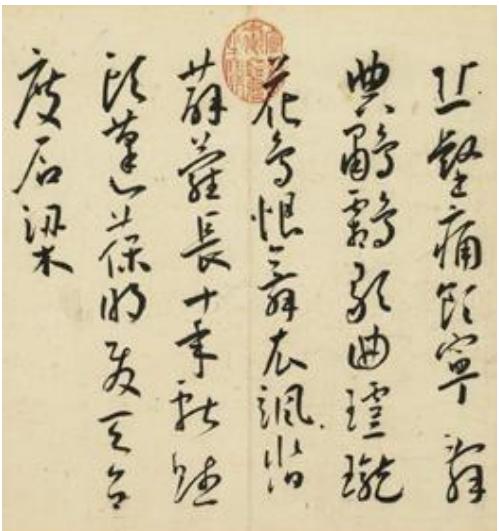
台北故宮博物館蔵

1538年56歳の作。卷には水墨写意で牡丹、蘭、竹、水仙、椿などが描かれている。陳淳特有の画風である。

王寵 (1494~1533年) 吳派 文徵明の後継者。蘇州の人。字は履仁、後に履吉。号は雅宜山人。

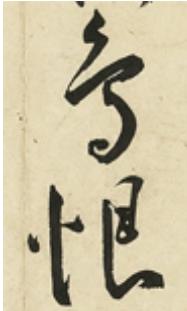
おうちょう

丘壑痛飲草書
樂醉歌賦曲韻璇
花香恨舞衣飄飄
游長才半醉酒
度石梁木



宋之問詩 嘉靖八年（1529）紙本 縦24.4cm 35歳

部分



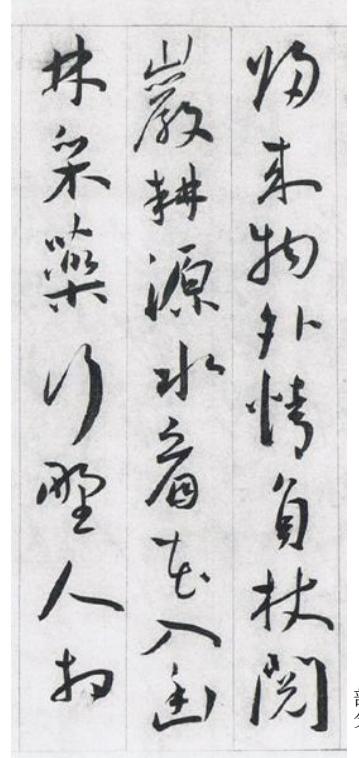
書雜詩冊部分 35歳頃？

この冊には計6首の七言律詩が収録されている。
ほとんどが独草体である。
明快ですっきりとし、硬質な筆遣いに見えるのは、用紙が質感の硬い金栗山藏経紙であるからか？転折部には丸みがあり、收筆に反捺筆が多い。力強く、素早い、変化のある筆法。

王寵は文徵明の弟子。徵明は王寵の芸能の才能を愛し自分の後継者とみとめていた。
病弱で、早世した王寵の墓誌銘は文徵明により撰文、書丹された。

王寵は師と同じように高潔な人柄であった。
科挙に八度失敗して官には就かず、湖のほとりに住み、世俗をのがれて読書・学問を修めた。詩文書画篆刻に優れていた。

詩文は『雅宜山人集』十卷がある。

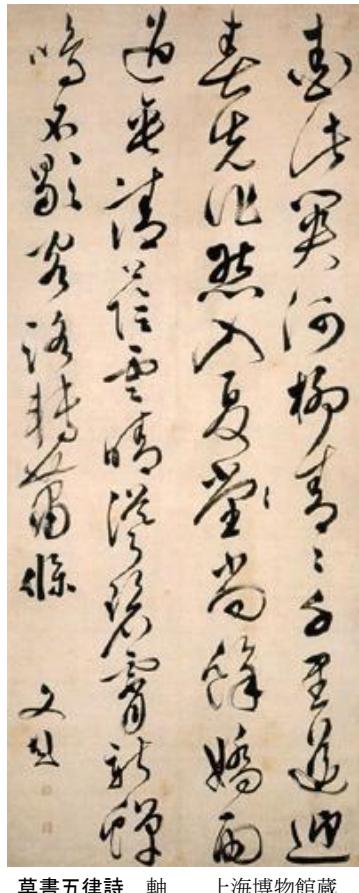


唐の詩人宋之間の五言律詩を烏絲欄をひいた金栗山藏経紙に書いている。

歸來物外情 負杖閱巖耕 源水看花入
幽林采藥行 野人相・・

書は晋唐人にせまるうとしたとか、鍾繇を学んだとか、虞世南、智永の楷書を学び、二王の行書、孫過庭の草書などを学んだとか言われるが、その影響は見られない。
行草書は我流と思われるが、逸脱で味わい深い。

文彭 (1498~1573年) 吳派 文徵明の長男 蘇州の人。



草書五律詩 軸 上海博物館蔵

ぶんぽう

(1498~1573年) 吳派 文徵明の長男

蘇州の人。

文彭 字は寿承。

号は三橋、三橋居士、

漁陽子。

书画家で篆刻家。

文国博とも称された。

篆刻に優れた業績を残し、近代篆刻の祖といわれる。
秦漢の印への復古を唱えた。

書は家学である文徵明の書を学んだのは当然だが、五体に優れ、王羲之、懷素、孫過庭などをして学んだと伝えられ、晩年には行草書に独自の書風を創造したといわれる。

高松賦 楷書 紙本 26.7×44.4 cm



部分

楷書は文徵明の書風そのままである

門下に後に篆刻の一派をなした何震がいる。



高松賦 楷書 紙本 26.7×44.4 cm



雲中白鶴

何震
かしん
(1541? ~ 1607年)

蒼崖

查舜佐氏
側款 長卿查允揆印
側款 丁酉仲夏作此奉別 何震長卿何震
かしん
(1541? ~ 1607年)

文彭之印



文彭之印



琴罷倚松玩鶴



琴罷倚松玩鶴



琴罷倚松玩鶴と側款

文彭は近代篆刻の祖といわれる。篆刻は職人の仕事であったが、文彭が青田石に自ら刻印してから、篆刻は芸術の域に高められた。文彭により印篆や刀法、側款が発展し、文人による篆刻が盛んになった。文彭は秦漢の古印を模範とし、その作風は女性的な美しさがあるといわれている。

※青田石（花乳石）を発見したのは元代末の王冕（おうべん）（1310 ~ 1359年）といわれている。

何震 字は主臣。号は雪漁山人、長卿。文彭の弟子。篆刻に優れ文彭とともに「文何」と並称される。文彭を継承し篆刻を発展させ、のがやかで枯淡のある作風を確立し新安印派（徽派）の開祖となつた。著書『続学古編』は吾丘衍の『学古編』とともに印学を学ぶ者のバイブルと言われる。

篆刻

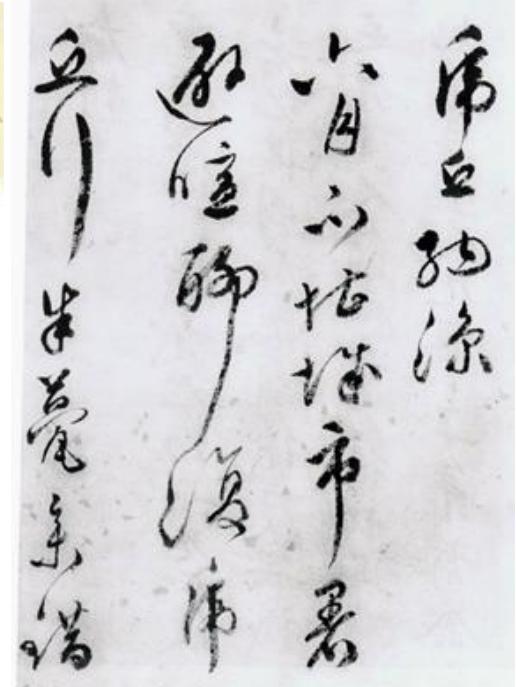


扇面 草書



墨蘭

文彭は墨蘭画が得意であった。



詩卷 部分 紙本 縦 28 cm 東京書道博物館蔵

詩卷は嘉靖四十一年（1562）64歳の作。文彭自作の七言律詩を十首ほど草書で書いた卷子。

虎丘納涼

六月不堪城市暑

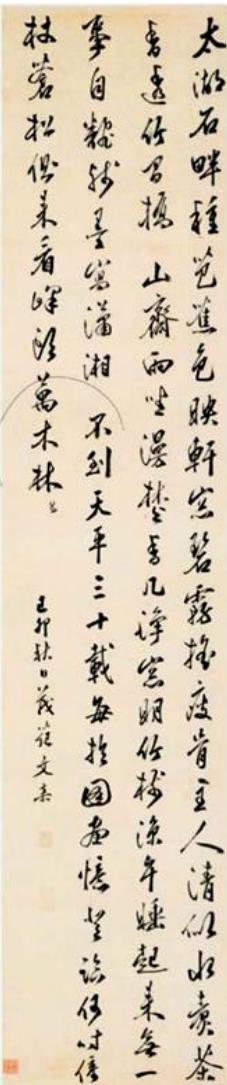
避喧聊復虎丘行

朱甍參錯・・・

虎丘は蘇州の名所。
文徵明の行草からはみ出して、祝允明や懷素や孫過庭の影響がみられる。

文嘉（1499～1583年） 吳派 文徵明の次男

字は休承、号は文水。書画家、書画の鑑定家。蘇州の人。山水画を得意とした。石刻は明代第一といわれる。文官。



行書七絶詩軸 1579年
79歳 約121×25cm 紙本
北京故宮博物院蔵
七絶詩三首を書いている。



行書扇面図



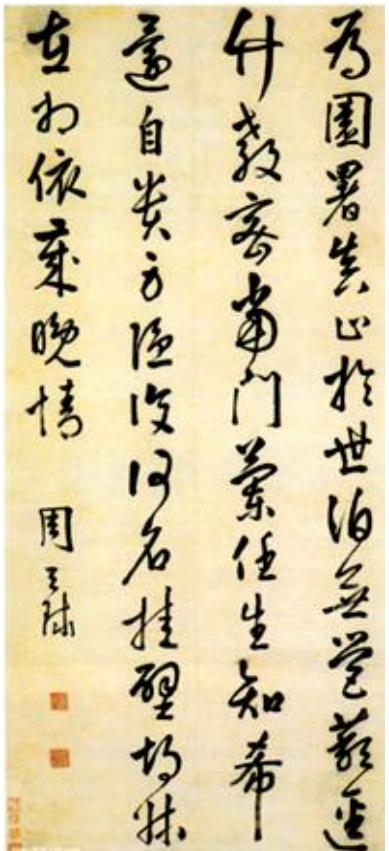
文伯仁（1502～1575年） 吳派 文徵明の甥 画家。

字は徳承、号は五峰。蘇州の人。科挙をあきらめ画業を生業とした。中国各地を旅して、文派の画風を伝え、文徵明の画風をより精緻に発展させた。王蒙を研究して独自の画風を作り上げたといわれる。



青溪放棹 18×55.3 cm
文派の画風で米氏の雲山図
を新解釈して描いたもの。

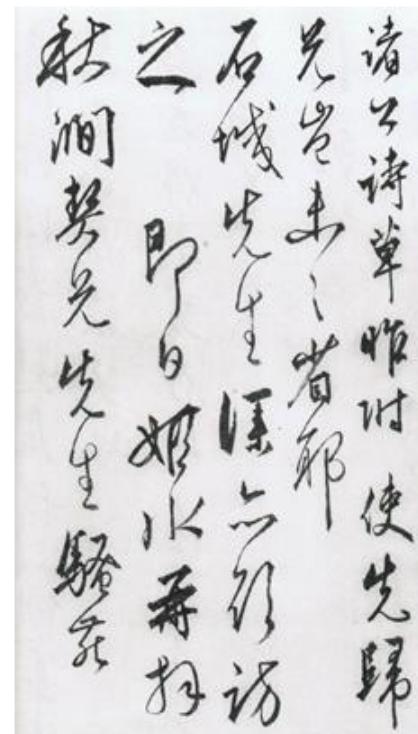
周天球（1514～1595年） 吳派 文徵明の弟子 画家。



黄姫水

(1509～1574年) 吳派 蘇州の人

祝允明の弟子で後継者。



尺牘 紙本 26.8×16.4 cm

秋澗宛の手紙。晋唐の古法の筆法で書かれている。

黄姫水 号は定靈子、質山。

一生官途にはつかなかったが、家が裕福だったので生活には困らなかったようだ。

文徵明や文嘉と親しく交わった。



仇英 (1509?～1552年?) 吳派

蘇州で活躍した天才画家。

桃李園図 知恩院藏

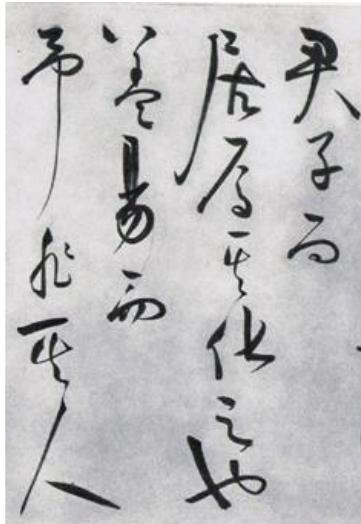
李白の「春夜宴桃李園序」に取材した作品。

桃李は兄弟姉妹の比喩か。

仇英

字は実父（実甫）、号は十洲。江蘇省太倉の下層階級の出身で蘇州に移住し、漆工から身を起こし、文徵明らと親しく交わり、彼らに高く評価された。

人物、山水画に優れるが、特に美人画に名声があり、美人風俗画の新しい様式を大成した。



何陋軒記 1508～1509年 紙本
縦約30cm 部分

王守仁は35歳の頃貴州へ謫せられた。謫地は家もなく言葉も通じない僻地であったが、次第に土地の人たちと仲良くなり、土民の助けで家を建て、その家を何陋軒（かろうけん）と名づけた。この記はその建立のときの作である。若書きの書。

君子而居焉。其化之也蓋易。而予非其人也。

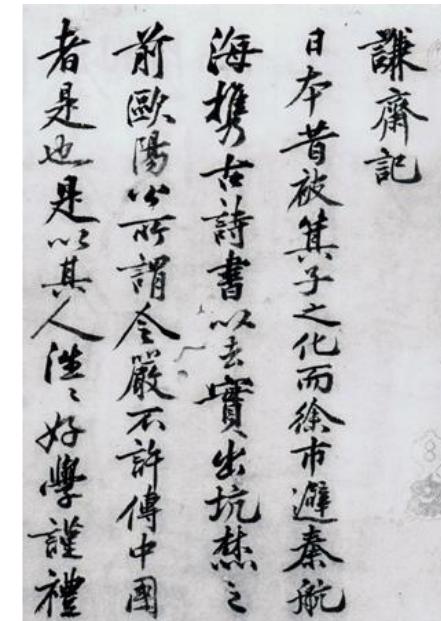
王守仁

字は伯安、号は陽明。

中国思想史の偉大な哲人。

明代の官学であった朱子学に対して陽明学という一派を開いた。

書は独特で鋭く遒勁で気迫がこもっている。



王守仁 (1472～1528年) 偉大な思想家。

謙齋記 部分 京都天龍寺妙智院蔵
嘉靖27年(1548) 紙本 縦28.2cm

天龍寺の僧、策彦周良が入門したときに豊坊から書いてもらったもの。

「謙齋」（けんさい）とは策彦の号である。

豊坊（豊道生）

字は存禮、号は南禺。寧波の名門出身。鄉試に首席合格し、続いて進士に合格したが、官歴は不遇であった。退職後、蘇州に隠れ住み名を道生、字を人翁と改めた。家の書庫の萬巻樓には多くの書の名品や蔵書があり、非常な勉強家であった豊坊には恵まれた環境であった。豊坊は俗界とは縁を断ち読書と書道だけに生きたといわれている。

著書に『書訣』などがある。

豊坊 (？～1576年?) 蘇州に隠れ住んだ変人。

謙齋記

日本首被箕子之化而徐市避秦航

海携古詩書以去實出坑憲之

前歐陽少所謂全嚴不許傳中國

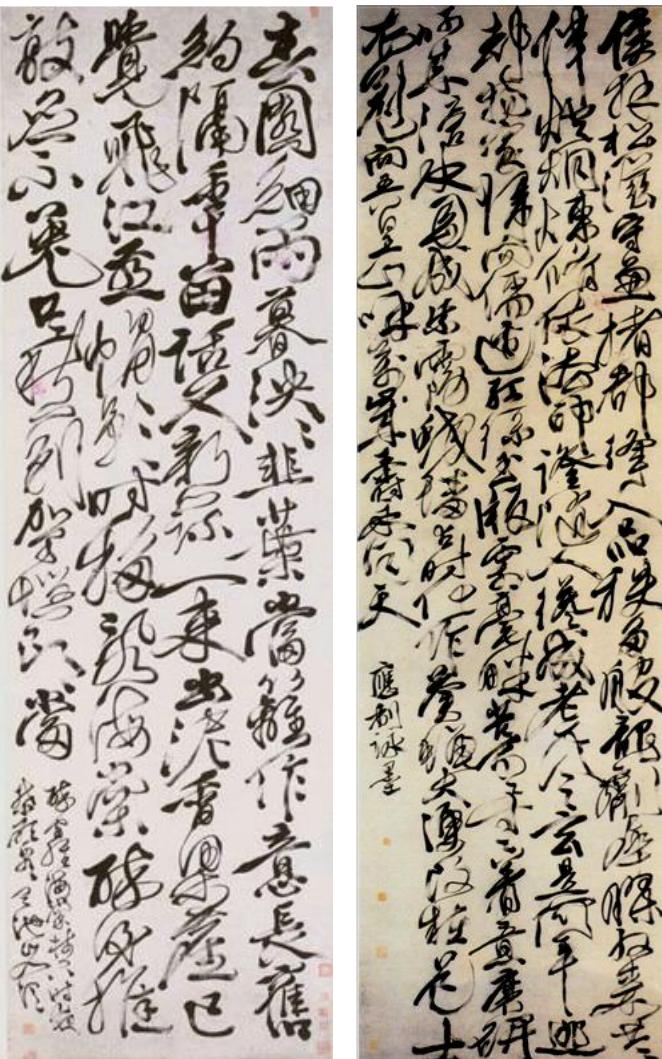
者是也是以其人淺好學謙禮

徐渭

(1521～1593年)

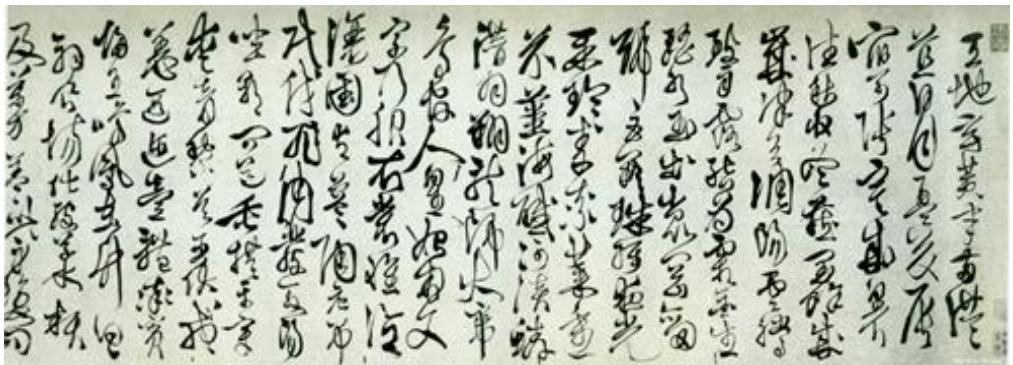
狂氣の天才。字は文長。青藤老人、天池、田水月、天池漱生などと号した。

浙江省紹興府山陰県(今の紹興市)に生まれた。早熟で幼少から聰明であったが試験は苦手で、41歳まで鄉試に8度落第した。詩文書画、戯作、小説などに天才ぶりを發揮し、剣術もよくでき、豪侠な性格であったらしい。紹興の名門の生まれだが、後妻の侍女の子として生まれた。父は生後百日で死に繼母に育てられた。21歳で結婚し25歳のとき長男が生まれ、翌年妻が死んだ。私塾を開き生計をたてた。41歳再婚し42歳のとき次男が誕生。46歳の冬妻の不貞を疑い殺害、入獄7年。獄中で本格的に画の制作を始めた。貧困と孤独のうちに世を去った。



七言律詩 軸 北京故宮博物館藏
紙本 縦 209.2×幅 64.4 cm 行草

応制咏墨詞 蘇州博物館藏
紙本 縦 352×幅 102 cm 行草
気力が溢れ、剣術に通じる稻妻のような運筆。巨大な紙面だが構成に破綻がない。



草書千字文卷 部分 紙本 31.2×495 cm 北京榮宝齋藏

応制咏墨詞

「応制詞」は皇帝から出された「御題」にしたがつて詞を作り献上された詞のことである。

この詞は、墨の製造の様子に事寄せで、王朝の統治を詠つたものらしい。筆線の変化に注目。巨大な紙面をものともしない生命力だ。

〔侯拜松滋、守兼楮郡、絳人品秩多般。竜劑犀膠、収來共伴灯烟。
煉修依法、印証隨人、才成老氏之玄。是何年、逃却楊家、帰向儒邊。
紅絲玉版霜毫畔、苦分分寸寸、着意磨研。呵來滴水、幻成紫霧蛟蟠。
有時化作蒼蠅大、便改妝道士衣冠。向吾皇山呼万歲、寿永同天。
惱郎當。 醉守經海棠樹下、時夜禁慾盡、天池山人渭。〕
応制咏墨墨

(書についての徐渭の考え方)

徐渭は行草書が得意で自由奔放な書風を確立した。

張旭・懷素の革新理論の影響を受け、書は氣力がすべてであるという考え方で、書の技法も書体も無視して自由自在に書いている。

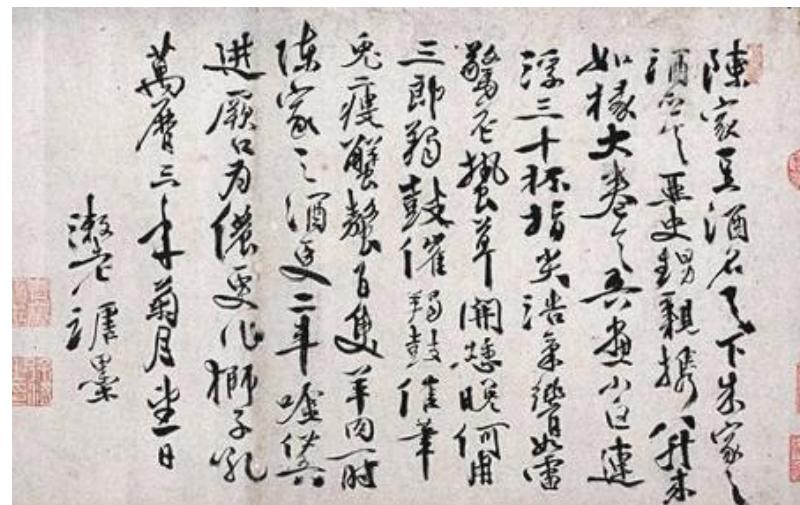
しかし、彼は書の技法も理論も専門的に窮めた人である。

蘇軾・米芾・黃庭堅・文徵明などの宋元明の書を好み晋唐の書法は追究しなかつたようである。
清代の八大山人や石涛や扬州八怪らに徐渭の書は大きな影響を与えた。



花卉雑画巻 葡萄の部分

1575年 紙本 縦28.4cm 東京国立博物館蔵



花卉雑画巻 部分跋

澆墨画法で使う
紙は滲みにくく
紙でないと効果
はでないようだ
ある。
すぐに墨が吸収
されない紙が良
いようだ。
紙が適當なら、紙
の上で墨の濃淡
が交じり合い、生
き生きとした自
然な効果を發揮
する。

澆墨の効果には
紙の質が大事だ
が、文人画家たち
は墨に膠を混ぜ
たりして工夫し
たようである。



菊竹図 遼寧博物館蔵

澆墨画法で使う
紙は滲みにくく
紙でないと効果
はでないようだ
ある。
すぐに墨が吸収
されない紙が良
いようだ。
紙が適當なら、紙
の上で墨の濃淡
が交じり合い、生
き生きとした自
然な効果を發揮
する。



アメリカ・フリーア美術館蔵

牧谿など宋・元の花卉画を模範とした。
陳淳とともに写意画派の代表とされる。

その画風は清代の画家たち（八大山人・石涛・鄭燮・趙之谦・吳昌碩・齊白石らの大家）に強い影響を与えた。

徐渭は山水はあまり描かなかつたが水墨の花卉雑画を好んで書き余白に題詩を書いている。

「花卉雑画」は草花・果物・野菜などの静物をモチーフとする。この題材は、牧谿・沈周・陳淳・徐渭・八大山人・石涛・揚州八怪・海上派とつづいたジャンルである。

澆墨技法

徐渭や陳淳は澆墨技法の大

家である。
澆墨の技法は唐代の王墨にまでさかのぼれるらしい。

紙の上に墨をまき散らし、偶然にできた濃淡の形を山や石や雲や水などに描きあげていく表現法である。

混沌の中から物を形づくるといったところか。

上の花卉雑画巻の葡萄の絵などはその例である。



青藤書屋

紹興市にある徐渭の旧居。レンガと石造りの平屋2部屋の庭園式民居。書斎の前にある池は天池と呼ばれ、ほとりに青い藤が植えられている。庭に竹林、築山、曲がりくねった小道がある典型的な明代文人の庭園である。



徐渭の落款印

落款印はたくさんあり、これらは一部である。

上右から「徐渭印」「徐渭之印」「天池」
下右から「文長」「天池山人」「田水月」

徽州出身で倭寇討伐に功績を挙げた浙江総督の胡宗憲（1512～1565年）は徐渭の人生に大きな影響を与えた。胡宗憲は嘉靖三十三年に浙江巡按御史となり、以後七年間倭寇討伐の指揮にあたる。武術と軍略に長けた徐渭は、胡宗憲に誘われ戦いに参加し戦果をあげ、武芸だけでなくその文才も認められ私設秘書として迎えられた。そのうえ自宅を建築できるほどの褒賞をもらつた。

しかし、頼りにしていた胡宗憲は嘉靖四十一年、政敵に弾劾され投獄され、嘉靖四十四年獄中で自殺（他殺？）して果てた。

胡宗憲という有力な後ろ盾を失い徐渭の生活は困窮した。徐渭はしだいに気が変になり自ら「墓誌銘」を書き自殺未遂をくりかえし、ついには妻を殺害し七年間入獄した。徐渭を助けようとして、減刑や釈放のため親身になって奔走した知人たちもいたのだが、胡宗憲指揮下の幕僚には文徵明や明代最高の墨匠の羅小華らがいた。胡宗憲も徐渭らも当時の知識人階級の男子によく見られる任侠的な気質の持ち主であつたらしい。中国には侠気を重んじる伝統がある。



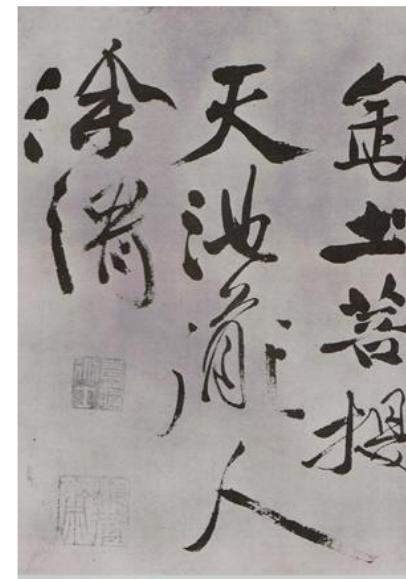
葡萄図

北京故宮博物院蔵



女芙館十詠 跋の部分 行楷書
紙本 29.8×446.8 cm 上海博物館蔵

右十詠。一為芙蓉。次芭蕉。玉簪。諼藜。雞冠。山查。野葡萄。土菩提。天池道人徐渭。



部分拡大

明墨

みんぱく

明代は造墨の最頂点といわれる。明末には墨づくりの名工が多く現れ、墨が鑑賞の対象となり墨譜などもつくれられた。製墨業は主に歙県に発展した。歙県では、羅小華から程君房・方于魯にと継承された。『程氏墨苑』には、墨型の版画500図を精刻し、『方氏墨譜』は385図を載せている。

新安の万端生は『墨海』十巻を刊行した。歴代の著名な製墨家の多くは同時に文学者であった。

明代中頃までは松煙墨が主流であった。羅小華の独自の工夫で桐油煙墨が開発され、つづいて程君房・方于魯がこれを改良し、清代に至って油煙墨が主流になって行く。



方于魯 「桃都」裏
91×73×1.5 cm



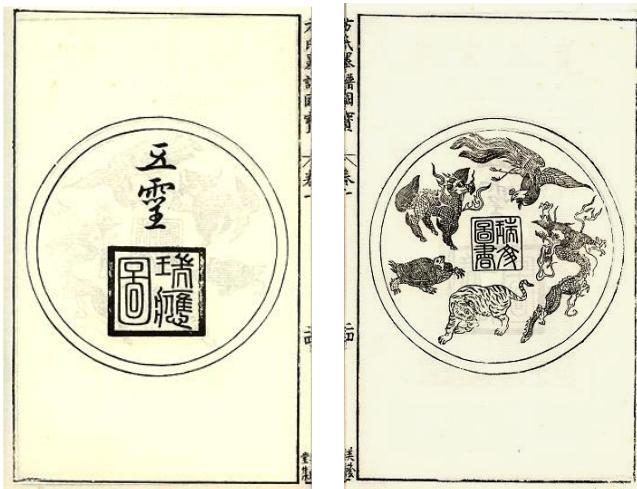
方氏墨譜



「程氏墨苑」より東岳泰山



程君房 「百子図」
直径 12.7 cm 高 1.9 cm



キリスト教のデザイン